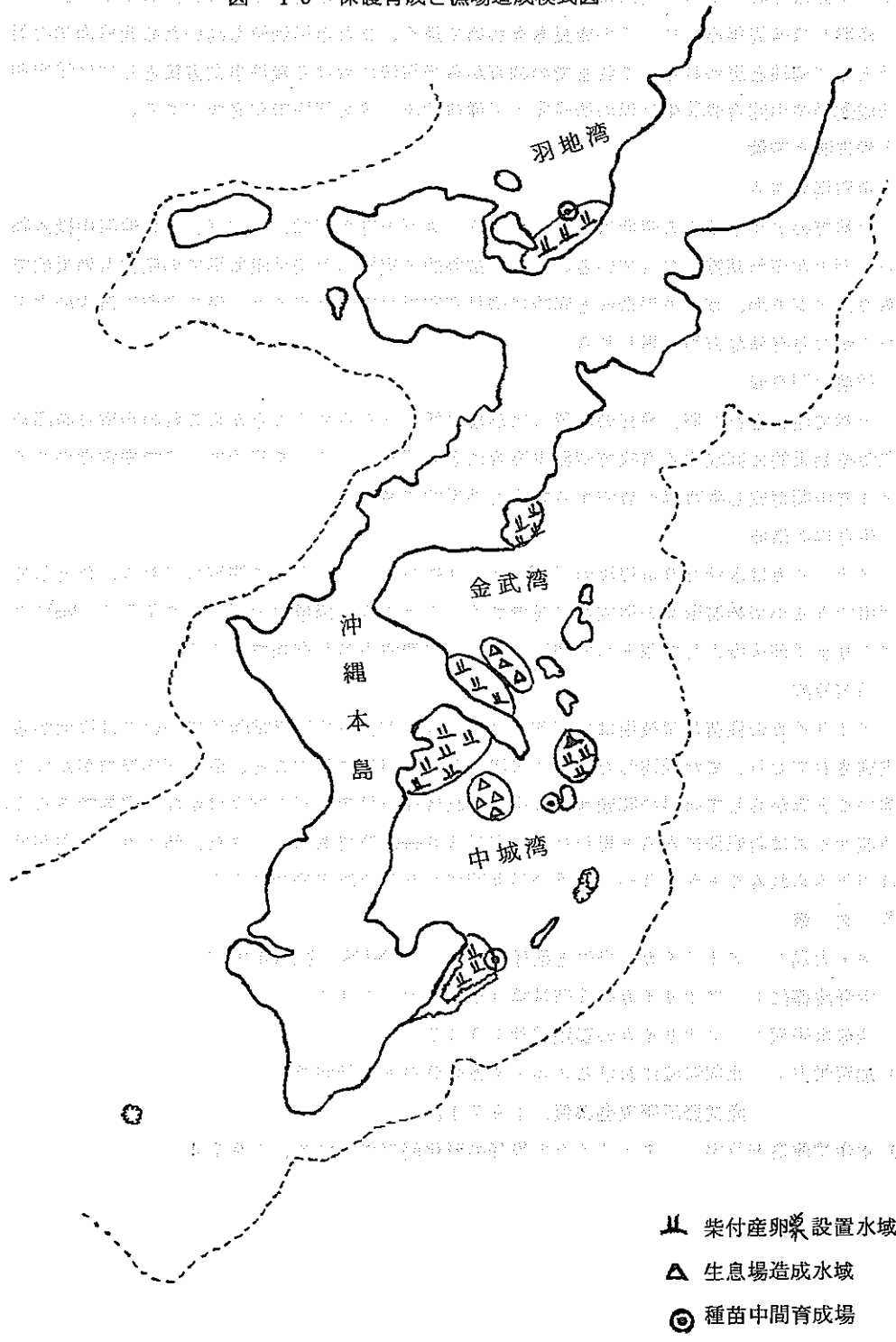


図-16 保護育成と漁場造成模式図



V 栽培漁業の展開（アオリイカ）

アオリイカはその生涯を湾内および湾外のごく沿岸水域で生活している。寿命が1～2年であり、産卵もほぼ周年みられ、その成長もきわめて速く、また市場価値も高いため栽培漁業の対象魚種として適種と思われる。これまでの調査から当海域における栽培事業方策としては①産卵場の造成②種苗中間育成③生息場の造成④人工種苗放流、等の諸施策が必要である。

栽培化の方法と施策

1. 産卵場の造成

天然でのアオリイカの産卵は、ホンダワラ、スガモ等の藻類、サンゴ、その他海中投入物の古網等が産卵基質となっている。また、試験的に実施した柴付産卵巣での産卵も効果的であり、アジモ場、ガラモ場造成と同時に柴付産卵巣の設置は親イカの保護産卵場造成の立場からかなり有効な方策と思われる。

2. 種苗中間育成

天然で産卵された卵、稚仔の歩留りはかなり低いとみられることからこれの歩留りを高め、資源を効果的に回収する意味で産卵巣設置により採卵し、それを蓄養施設等で安定期のサイズまで中間育成し生育場へ放流する施策も効果的である。

3. 生息場の造成

アオリイカは水深20m以浅の天然のサンゴ礁を主生息場として滞留しており、蔭として利用できる小型の滞留礁の造成が必要である。1ヶ所50個単位のブロック魚礁を1km²当りに10ヶ所前後投入して蔭として利用できる漁場造成方策も有効であろう。

4. 種苗放流

アオリイカの種苗量産技術はまだ確立されていないが、孵化飼育試験等については以前から実施されており、また前述したように産卵期がほぼ周年に及ぶこと、環境適応能力がかなり強いこと等からして餌料の問題さえ解決できれば種苗量産体制の確立はかなり容易であろう。放流サイズは着底期に入ると思われる背套長30mm前後であろう。また、幼イカの出現がほぼ周年みられることから3～10月の長期間にわたり放流可能であろう。

参 考 文 献

- 1) 崔・大島：アオリイカの発生と稚仔の成長 VENUS：21(4)1961。
- 2) 伊野波盛仁：アオリイカの養殖試験（くろしお 1965）
- 3) 琉球水研報：アオリイカの養殖試験1967。
- 4) 加賀栄吉：北部海域におけるスルメイカの分布と移動回遊について。
漁業資源研究会議報、1971。
- 5) 水産業改良普及室：アオリイカの稚仔の孵化飼育について、1974。